

---

# 口怪女

彩美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

口怪女

### 【Zコード】

Z9359M

### 【作者名】

彩美

### 【あらすじ】

ある日、突然家に押し掛けてきた、顔の輪郭全てが巨大な口で支配されている怪物。

学生であり、今年から一人暮らしを始めたばかりの主人公。

怪物は、一向に家から出て行く気配がない。

普通の人間では有り得ない特徴を持つた怪物と、ごく普通の人間である主人公。

「異次元」という境界を超え、打ち解ける事が出来るのか？

「火とか、いじらないでね。絶対！！」

つい1週間程前の事だ。

学生であり、一人暮らしをしている俺が

一人暮らしでなくなつたのは。ある雨の日のことだった。  
いつも通り夕飯を食べ、そろそろ寝ようとした午後11時半。  
トイレに行こうとした時、玄関のドアが叩かれた。

ドン、ドン！  
ドン、ドン－

・・・誰だ？

こんな時間に。

それに、ウチにほひやんとチャイムが付いてる。何でチャイムを鳴  
らさない？

普通、チャイムを鳴らすと思ひけど・・・。

とりあえず、足音を立てないように、玄関へ向かう。  
ドアを叩く音は、既に止んでいた。  
外を覗こうとして、思い出す。

・・・そういえば、あつたな。怖い話で  
ドアを叩かれて出たら、幽霊がいたとか・・・。  
それあの世に連れて行かれたり。

こんな時間だから、そんな事が頭によぎる。

恐怖を抱きながら、ドアスコープを覗く。

黒いものが見えた。

髪の毛つぼい。

何か、長い、気がする。  
声をかけてみる。

「じゅり様ですかー···?」

···。

返事は無かった。

「···聞こえます?」

またもや返事ナシ。

これは、本当に幽霊かも。  
さっきまで感じていた恐怖が増す。

俺は断じて靈感など無い。

だから幽霊なんてものは見たことが無い。

それなのに、恐怖を感じていた。

···。

相変わらずの無言。

そのまま放つておいても眠れないし。

開けちゃえ。

ガチャ。

最初に目に飛び込んできたのは、わちわちわちと見えた黒いものだつた。

あ。やっぱり髪の毛だつたんだ。

・・・目先を少し上げて固まつた。

クチだ。

人間に口が付いてるのは、誰だつて知つてている。  
だけどこれは違う。

これは

顔の輪郭全てを満たしている。

それが、口だ。

「イツは腕もあるし、足もある。指だつて生えてる。  
身長も、俺より少し高い位だ。」

でも。

目がない 鼻がない。

本来 人間ならば、あつて当たり前の。

普通の大きさの顔の輪郭に、不釣り合いで付いた口。

♂テカイ口。

閉じてない。開いている。

とがっている歯が見える。その奥から♂テカイ舌も見える。

こんな人間、見たことない。

俺は図鑑が好きではないが、こんな種類の生物、見たことない。

皿をこする。

これは、夢？

もしかしたら俺は、もうひとり寝ていて、夢でも見てるんじゃ？

それでも前を見る。

何とか現実を把握しようとする。

少しでもコイツの顔に近付いたら、その顔の大きさ程の♂テカイ口に噛み殺されそうだ。

“ 近付くな ”

本能がそう告げる。

髪は腰ぐらいまである。体格的にも、女性っぽい。

その女・・・女と仮定しておこう。

その女は、こっちを見ている。・・・いや、見てるんじゃなく、体も顔（口？？）も、こっちを向いたままだ。

ぴぐりとも動かない。

ジロジロ見ていろうちに、恐怖も減少してきた。  
わざからコイツは一言も喋らない。

何なんだ、コイツ。

するとその女は、じりりと近付いてきた。

「・・・・・」

び、ビリよい。

い、殺される・・・?

何とかしなきや!

「ど、どちら様ですか!!」「こんな夜中!」  
そんな姿で・・・。

だんだん俺の顔に近くなつてくる。  
ヤバイ。

「な、何する気ですか!!警察呼びますよ!」

殺される

俺は反射的に目を瞑つた。

すると、俺の左側にぬるりと生暖かい空気が過ぎた。

俺は目を開け、左側を見る。特に何もない。

・・・ん?

続いて後ろを見る。

俺は目を丸くした。

女が、俺の家の中へと入っていく。

「ちよ、ちよっとーー！」

俺は急いで女を追った。

女は歩くのが遅かった。俺はすぐに女に追いつき、肩を掴んだ。

「なに勝手に人の家に上がつてんですかっ！ 出で行つて下さーい！」

すると女はゆっくりと体をじわじわに向けた。

「・・・」

改めてその迫力に圧倒する。

すごい。歯の先端が1本1本とがつている。歯まで・・・。人間にも先端がとがつている歯はあるが、全部はとがつていない。こんな歯で1回でも噛まれたら、一気に体に穴があくだろう。

噛まれて体中に穴があくシーンを想像して、寒気がした。

それで体中が血塗れになつて、それで・・・。

・・・と、いけない いけない。  
まずはコイツを説得しないと。

それにもこの女、喋らない。息の音も聞こえない。  
・・生きてんのか?」

俺は女の肩を掴んだまま、深呼吸した。

「・・・あの。俺に何か用ですか?」俺の家なんで、勝手にズカ  
ズカ入られちゃ困るんですけど」

「・・・」

「・・・」

「それに・・・その口の大きさ。に、人間じゃない・・・よね?」

「・・・」

あくまでも、喋らない気だ。

その顔の輪郭全てを支配してる口は何のためにあるんだよ。

「聞いてます?」

耳あんの?」

確認したいけど・・・。これ以上近付けない。怖い。

しばらく無言が続く。

「・・・」

すると女は再び俺に背を向け、歩き始める。  
俺は再び声を上げる。

「あ?」

のそのや。のそのや。  
・・・」

「・・・え」

女は、居間にあるソファに体を寝かせた。

「・・・あの？」

女は動かない。

・・・俺は、恐る恐る女に近付く。

口、カリギリ今まで近付いた。

・・・クー。 クー・・・。

・・・寝息。

間違いなくコイツの寝息だ。

顔の輪郭全てになる、デカい口の奥から響いてる。  
息を潜め、耳を澄ましてみる。

クー・・・。 クー・・・。

ほひ、やつぱり。

言葉は発しないくせに、寝息はたてるんだな。

横向きで寝ているからか、下にしている右側の髪は無事だが、上になっている左側の髪が少し顔（口？）にかかっている。顔にかかりつつある髪の間から、肌色が見えた。

・・・よく見たら耳だ。

耳、あるじやん。聞こえてんじやん・・・。

いや、待てよ。耳が聞こえない人だつたのかも・・・。

・・・うーん・・・。

でも、目は見えてるよな?

歩くのは遅かつたけど、何に頼ることなく1人で歩いてたし。  
それに、あんなスマーズにソファに寝転がれたんだ。  
見えてなきや出来ないって。 あんな事。

ん?

でも何処にも目はないよな?

なら、どうやって周りを見ているんだ?

体の何処かに目がついてるとか・・・。

俺はゾクッとした。

・・・まさかね。防犯カメラかよ。

でもコイツは人間じゃない。・・・だから、ありそつて恐い。

俺は考える事もなくなり、スッと肩の力が抜けた。  
その衝撃で、ガクンと床に座り込む。

これから、どうしよう。

この女はずつと無言。何を言つても喋らない。

玄関に居るときは、息していないみたいだつたのに、寝息はたてている。

・・・一応、生きているんだな。

耳はあるみたいだが、聞こえてないみたいな反応をする。  
耳が聞こえない人かもしね。もしかしたら、聞こえてないフリ  
してるのであるかも・・・。

いや、聞いてるけど、無視してるだけじゃないか？　俺はそんな気がする。

聞こえないフリをするなら、俺に肩を掴まれても、手を振り払い、勝手に動けばいい話だ。

・・・そういえば、コイツは目（？）は見えてるみたいだ。  
耳が聞こえなくて、俺の口が動いてるのを見てただけかもしれない。  
それで、動きを止めたのかも・・・。

ああ、頭が混乱してきた。

とにかく、休もう。

コイツは出て行つてくれないみたいだし、起こすのも面倒だ。

・・・しかし、何で寝たんだ？　もしかして浮浪者か？  
・・・だとしたら何で俺の家を選んだ？

いやいや、コイツは人間じゃない。

浮浪者だとしたら、とっくに警察行きだ。  
こんなデカい口だもんな。

相手が警官でも食い潰してそうだ。

・・・そもそもコイツが人を食つかなんて、俺は知らないけど。

それにしても、何て冷静なんだ、俺は。

ちらりとソファの方を見る。

相変わらず女は寝ているようだ。  
起きてくる気配はない。

最初こそ激しく動搖したものの、女が寝てから、すっかり安心しきつている。

いつ女が起き上がつてくるか、分からぬのに。何故か、安心しきつてしまつていた。

・・・女が、危害を加えて来ないからだらうか。

細かい事は、明日、女が起きてから聞こい。

もしかしたら、今日は疲れていて、言葉が出てこなかつただけかもしない。

さつき、もう寝ようと思つたけど、ずっと起きてた方が良いよな。女がいつ起きてきて、何やらかすか分からぬからな。

俺は近くの壁にもたれ掛かり、薄田で女を見た。

「本当、何なんだ、コイツ・・・」

俺はほまいと思つていたのに、いつの間にか寝てしまつていた

ようだつた。

朝、俺が起きたと同時に、女も田が覚めたようだ。

・・・夜通し俺がこの女を見張るつもりだつたのに・・・何だか俺が夜通しこの女に見張られているみたいだつた。

俺がこの女を警察に連れて行く事だつて出来た。

・・なのに、そうしなかつた。

不思議と、そうする気になれなかつた。

そんなこんなで今に至る。

俺は女を1人残し、家を出た。

時間は8時32分。うん、間に合ひ。

家から学校まで徒步10分。ホームルームが始まるのは8時50分。俺が学校に着くのは8時42分。

といつわけで、遅刻しない！

家を急いで出て来て、呼吸が乱れていた。  
歩調を少しだけ遅め、呼吸を整える。

・・・あの後、女が来た日。

朝になり、女に尋ねてみたんだけど・・・。

やつぱり言葉は発してくれなかつた。

・・・でも代わりに、頷いたり、首を振つたり、傾げたり。

俺が質問するたびに、反応してくれた。

まず最初に、一番聞きたかつた事。

お前は一体、何者なんだ？  
：首を傾げられた。

人間ではないんだろ？・・・一応聞いてみたが、またもや首を傾げた。

何処から来たんだよ？・・・この質問にも首傾げ。

ここまで質問で、分かった。

コイツは、自分の事をよく知らないんだ。

でも、一応・・・意志みたいなものはあるんだ。

だから、言葉を発せなくても、反応をしてくれる。

これからどうするつもり？

・・・何回だ？ また首傾げ。

ここまで来たら、首傾げ上等。

まさか、このまま俺の家に住み着く気？

・・・少し間をおき、女は頷いた。

・・・そう。頷いた。

頷いちやつたんだよ・・・。

つまり、俺の家に住み着く気らしい。

はあ！？じ、「冗談だろ？」

・・・首を振った。

ほ、本気なの？俺の家に住む気？

・・・今度はしっかりと頷いた。

マジかよ・・・。

ん？ 待てよ。

あのせ、そういうばあ前つて、女なんだよな？・・・迷うことなく、頷いた。

コイツ・・・。自分の事よく分かつてないクセに、自分の性別だけは分かるんだな・・・。

やつぱり女か。年はいくつ位？ 20代？  
・・・一度首を傾げ、頷いた。

「多分」ということなんだろうな。

ここまで来て、ある疑問が湧いてきた。

何で、この家を選んだの？女なんだつたら、女の居る家の方が良かつたんじゃないのか？  
・・・女は首を傾げる。

質問したあと、ハツとなる。

もしかしたら、他の家じや受け入れてもらえなかつたのかも。  
いや・・・受け入れないどころか、通報するだろう。普通の人は。

それじゃあ、俺の家までどうやつて来た？  
時間は午後1時半位だったが、人だつているはずだ。

俺の家は住宅街にある2階建てのアパート。  
俺の部屋は1階にある。

人に見つからずにアパートまで来れたとしても、アパートの住人に見つかる可能性だつてある。

俺の住むアパートの人達は、大人の人ばかりだ。

学生なんて俺しかいない。

アパートの人に子供がいるなんて聞いてないし、見たこともない。  
だが、普通に夜は起きてるはずだ。

上の階の人の歩く音だつて聞こえる。

この間なんて、隣の人ピアノで「翼をください」を弾いていた音を耳にした。

間違つた箇所だつて覚えてる。

丁度盛り上がりてきて、サビに入る直前に間違つたんだ。間違つて、急に演奏を止めてしまつたらしい。

その後は違う曲を弾き始めたようだつた。

今度は間違うことなく、スムーズに弾いていたようだ。

まあ、とにかく。

当然、外を歩く人だつているわけだ。

多分2日前位、学校の宿題をしながら、ボーッとしてた時だ。何気なく窓の外を見たら、同じ一階に住む森崎さんが買い物袋を手に提げて、アパートの方へ向かつて来ていた。買い物が終わつて、帰つてきたんだろう。

午前2時位だつたかな。

森崎さんは40歳位のオジサンで、未婚。

酒が好きで、時々夜中に一人で酒を飲んでるらしい。本人から聞いた。

サラリーマンの人だつている。

遅くなり、夜中に帰つて來るのは珍しくない。

・・・とにかく、人に見つからずに俺の所まで來るのは不可能だと思つ。でもコイツは・・・言い方は悪いけど、ハッキリ言つて化け物だし。

テレポートとか？

うーん……。この件については、深く追究しないでおい。

あー。でも。

お前つてテレポートとか出来るの?

・・・首を振られる。

ならや、じゅりって俺の所まで来たの?

・・・首を傾げた。

やっぱり分からぬいか。ああ・・・。今思えば、コイツが嘘をついている可能性だつてあるんだ。

可能性は無限大・・・。

ここはアパートで、色々な人が出入りするんだ。もちろん勝手に俺の部屋に入ってきたりとかはないけど。

1日中お前が俺の部屋にいても、人に見つかる可能性はあるんで。見つかった場合、連れて行かれるよ? 警察とか。

・・・女は首を傾げる。

よく分からぬみたいだ。

連れて行かれたとしても、俺は一切、責任をとらないからな。

・・・女は無言だった。  
といつより、無反応。

じゃあ、自分から来たとはいえ、抵抗はないわけ?

俺、一応男だし、一人暮らしだし。  
・・・女は頷いた。

抵抗はないのか。

・・・あまり人の事は気にしない奴なのか？

「うーん・・・。しばらく家に置いてやつても良いよ。  
どうせ俺一人だし。

それにー・・・。

そこまで言いかけて、言葉を止めた。

女は反応しない。

いや、何でもない。

それに家から出て行く気は、ないんだろう？

・・・女はしつかりと頷く。

その代わり、家から一歩も出るなよ。カーテンも開けるな。

まして、玄関のチャイムが鳴って、それに出るなんて事は、絶対に  
駄目だからな！

・・・女は頷く。

本当に分かってるんだろうな、コイツ・・・。

あと玄関の鍵とか、窓の鍵も開けるなよ！

念のため！

・・・女は頷く。

あとつ、勝手にご飯作ったり、洗濯も駄目だからな！

・・・女は頷く。

でも、コイツにそんな器用な事が出来るのか？　あ、因みに洗濯物  
を干したり、取り込まなくて良い。まして外へ出る事にも繋がるか  
らな。あとは・・・。

息が切れてきた。一気に喋りすぎた。

勝手にシャワーを浴びたり、ドライヤーを使わないでくれ。使いたいなら、俺に言つてから使ってね。

・・・俺は一度、息を吐いた。

でも、トイレは自由だから。トイレットペーパーを多く使いすぎたり、トイレを汚したりはしないでね。

そうだ、お前ってトイレの使い方、分かるの？

・・・女は頷く。  
・・・怪しいな。本当かよ。

台所に行くのも禁止。食い物は、俺が指定したものならOK。あと、俺の部屋に入るのも駄目ね。あれなんだけど。

俺はそう言つて、田の前のドアに指を指す。

女は俺の部屋のドアを見た後、ゆっくりと頷いた。

俺は学生だから、平田の毎晩は家にいない。

いないからって、好き勝手するなよ。

お前は普段から、この居間にいる。

ソファもあるし、座つてろ。

絶対に、トイレ以外で立つたり歩いたりするなよ。

眠くなつたら、ソファで寝ていいからさ。

・・・女は頷く。

俺がいる時は別に、立つても良いけど。

あと、「いつ」と、あつたっけ？

あと、これらの質問もそうだけじ。俺が聞いた事には、正直に答えてくれよ。

嘘は絶対に駄目。

・・・女はしつかりと頷く。

一気に喋って、疲れた。

俺は女を見る。

女は、ぴくりとも動かない。

そして俺は女に、いつ言った。

「これからようこへな

何をよろこべるのか分からなかつたが、とりあえずそう言つてみた。

約束をした日からあの女は、一度も約束を破つていなかつた。台所や風呂場も、そのまま。何かを食べた跡はない。

俺が帰つても女はソファに座つたままで、こちらを向くだけだ。

ただ、トイレにはひやんと行つてゐようだ。

学校から帰つてきたら、朝の時よりトイレットペーパーが少し減つていた。

トイレも汚したりしていない。心配は要らなかつたようだ。

・・・でも、俺が学校に行つてゐる約7時間、ずっとソファに座つてこるなんてキツすぎると。

俺だつたら逃げ出していると思つ。

うーん、今度アイツに何か暇潰しになる物でも『えてやるか。

因みに朝食・昼食・夕食は相変わらず俺が作つている。女は一応腹は減るらしい。だから女の分も作つている。

・・・作らせて良かつたんだけど、俺が見ても、何やらかすか分からぬ。アイツ。

平日の昼間だけは俺がいないんで、朝に俺の弁当と一緒に女の分も作つてゐる。

俺がない時、女はずっとソファに座つてゐるので、ソファの側にテーブルを置いて、女には其処で食べてもらつてゐる。

・・・ アイツにも一応味覚はあるらしい。  
昨日の夕飯はオムライス。

・・・ その時の会話を思い出してもみよう。

：

……

「夕飯出来たぞー。あれ、何処行つた?」

俺は女を探す。

すると女は、隣の和室から出て來た。

「おいおい、和室で何してたんだよ

俺は隣の和室を覗いた。

・・・ 毛糸が転がつていた。

しかも、ほとんど解かれてる。

「毛糸・・・解いたんだな・・・」

女は頷く。

ああ、最悪・・・。

また巻き直せなきゃならないじゃん。

しかも毛糸つて・・・。

「猫かよ」

女は何も反応しないまま、居間のテーブルに目を向ける。  
巻き直すのは後で良いや。 先にオムライス。

「今日はオムライスだよ・・・

女は素早く席に着く。

・・・お腹空いてたのか？

俺も席に着いた。

オムライスからはまだ湯気が上がっている。

女はスプーンを持ち、オムライスを口に入れようとした。

「ああっ、待つて」

女は手を止め、こちらを向く。

「卵の上にケチャップとか、かけないの？ 俺はかけないんだけど」

俺はそう言つて、女の目の前にケチャップを置く。

すると女はケチャップを手に取り、蓋を開けた。

そしてケチャップを逆さにし、自分のオムライスにかける。

・・・人間みたいだな。

動作は。

女のオムライスの状態が気になり、覗いてみる。

「・・・ふつ」

俺はつい、笑ってしまった。

意外だったのだ。

女のかいたものが。

「何でハートなんだよ」女のオムライスには、しっかりと形の良いハートが描かれていた。

女は俺の事は気にせず、オムライスを食べ始めた。

・・・一体、何処でハートマークなんて覚えたんだ。

それについても案外・・・。「可愛いとー」、あるじゅん・・・

女は俺に見向きもしない。

少しの間、女を見ているうち、「俺はハツと我に返る。

・・・俺も食べちゃわないと。

俺は食べ始めた。

女はもう半分食い終わってる。早いな。

・・・そういうば、コイツに味覚はあるのか?

「・・・美味しい?」

俺は気になつて聞いてみた。

俺的には、結構美味しいと思つけど・・・。

何て答えるかな。

女は俺をチラツと見た。

そして、勢い良く首を横に振った。

「・・・」

不味いってことか。

ちよつとショックだ。

別に俺は味覚音痴なわけじゃない。

人が美味しいと言つたものに共感出来るし、人が不味いと言つたものにも共感出来る。

・・・ただ、サラダとかにドレッシングとかかける奴は理解出来ない。

もともとサラダも嫌いだけど、ドレッシングも嫌い。

ベタベタするだけじゃん・・・。

・・・女はもう食い終わったようだ。

いつの間にかソファに移動して、寝転がっていた。

「・・・」

良いなあ、寝転がれて。俺はこの後、食器洗いと宿題があるの。

女のテカい口から、寝息が聞こえる。

・・・もう寝たのか。

俺も小学4年位まで、こんな感じだったよ。

学校から帰ってきて、夕方まで友達と遊んで、家に帰つてきたりすぐ夕飯。

夕飯食つたら、ゲームして遊んでさ。

宿題もやらずに、確か午後10時前には寝てたな。  
すぐ朝になつて、また学校行つて、授業。

宿題やつてないから、先生に怒られてさ。

そうそう、1回、酷い怒られ方をした事があつた。

小4の時かな。

確か算数の宿題やつてなくて。先生がブチ切れで。みんなの前で1

時間位、怒声浴びてや。

その後、家まで押し掛けてきて。

俺の親に散々文句言つて帰つてつたな。

その日の夜、朝まで両親に怒鳴られた。

あんなに怒られたのは

生まれて初めてだった。

朝まで説教を食らった俺は、寝る暇もなく、クタクタ。

説教が終わつた時には、もう学校に行く時間。

「眠いから休みたい」って涙目で訴えても  
「行け」って無理矢理、家を追い出された。

その日は一日中、不機嫌だった。

どうしても眠くて授業中ウトウトしてたら、授業中に先生に注意され、  
そして放課後も職員室に呼び出され説教された。

それが面白くなかった俺は、家に帰つても気分は晴れず。

夕飯の時、一口もご飯に手をつけなくて親に怒られた。

その日の夜はふてくされて熟睡した。

・・・今思つと、2日間怒られっぱなし。

あの時の事は、今でも鮮明に思い出せる。

俺の事を叱りまくつた担任の事だつて忘れてない。

ああ・・・思い出したら苦しくなつてきた。

忘れよう・・・。

思えば、小5位から親が煩くなつたんだっけ。  
今は大分、マシになつたけど。

俺が今年に入つて一人暮らしなのは、両親が決めた事だ。  
高2の4月位に、「どうせ高校卒業したら一人で暮らすんだし、高  
3になつたら練習として一人暮らししてみなさいよ」  
と言われた。

高2の1年間で家事を色々と教え込まれた。

そんなんで今は社会人になつた時のために、一人暮らしを練習中な  
のだ。

一人暮らしをして、親のありがたみが分かつた。

俺、今までなんて贅沢な暮らしをしてたんだ・・・。  
料理も洗濯も全部やつてもらつて、自分は寝てるだけで良いなんて・  
・・。

そんな事を考えながら食器を洗い、その後宿題を済ませ、暗い気分  
のまま俺は眠りについた。

そして、今日に至る。

はつきり言つて、昨日の夜に嫌なことを思い出したせいで、寝不足  
だ。5時間位しか寝てないだろつ。多分。

昨日の事を思い出してこの間に、もう教室の田の前だ。

『3 A』

そう書かれた教室。

俺のクラスはここだ。

一応腕時計を見る。

8時43分。よし、遅刻じゃない！

俺はいつも通り後ろの戸から教室に入り、誰に声をかけることもなく、自分の席に着いた。

『川崎 龍也』

そう書かれたテープが貼つてある、窓側の前から2番田の席。  
それが俺の席だ。

教室は騒がしい。

俺はため息をつく。

・・・静かにしてほしいなあ。

やがてチャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。

生徒たちはみんな、慌てて席に戻る。

いつも通り先生が喋り、そして話が終わり、先生は教室を出て行く。

そこからの時間はゆっくりだった。

俺の大嫌いな数学から始まり、お昼までの最後の一時間の授業は生物。

うーん、最悪な締めだ・・・。

生物の授業が終わり、昼休みが始まった。

やつと弁当を食べる・・・。

俺は生物の授業中、ずっと腹が鳴りっぱなしだった。

必死で鳴らさないようにしてたから、授業を全く聞いていない。

・・・いつも聞いてないけど。

そんな事を考えていると、上から声が降ってきた。

「食わないの?」

俺は驚いて顔を上げる。

「円香」

円香は俺の席の前に立ち、俺の弁当を眺めていた。

平井 圓香。

俺の隣の席の奴だ。

・・・円香は女っぽい名前だけど、男だ。

本人もそれを気にしている。

「円香って呼ばないでくれよ。名字で呼べよ  
」もづ定着しちゃったし、円香で良いじょん

ムツとある円香を見て、俺は付け加えた。

「それに、世間的には名字で呼ばれる事が多い。だからたまには、名前で呼ばれるのも良いだろ」

円香は無言。

そして、ため息をついて口を開いた。

「・・・まあ良いや。弁当食おうぜ」

円香はそう言い、自分の机の椅子を俺の机の前に置いた。

「あつ、やうだ」

俺は思い出す。弁当に、昨日のオムライスを入れてきたんだった。

「円香、オムライス食う?」

俺は弁当の中のオムライスを円香に見せる。

「美味そづじやんーもひつ」

俺の弁当につぱいに詰まっていたオムライスを半分に切り、笑顔の円香に渡した。

「はー」

「サンキュー」

円香は礼を言い、オムライスを口に運んだ。

俺はじつとそれを見る。「・・・美味しい?」  
気になつて聞いてみる。

「普通に美味しいよ。俺の母ちゃんよつ上手」

そう言って、円香はオムライスを食べ続ける。

・・・何か、お母さんに失礼な気がする。

「本皿?」

「うん」

「どれくらい?」?

・・・俺って疑り深い。

「うーん…。上のいくらいかな」

「・・・」

そんなに美味しいかな。

「安心しゆって。俺、結構、味に頬いよ

「・・・」

まあ、円香は味覚音痴ではないし、信用出来るだろ?。

うん、あの女の味覚がおかしいんだ。きつと。

俺は一安心した。

「あー、美味かつた。

『ちしつさま』

俺が考え事をしている間に、円香は食い終わったみたいだ。

「丁度弁当忘れてきたから、助かつたわ

・・・通りで何も持ってきてないと思った。

「ああ、それは良かった」「とにかくでさ」

円香は俺に向き直つて言った。

「自分のは食わないの?」「・・・あ」味の感想に捕らわれていて、自分のオムライスを食うのを忘れていた。

「早く食わないと、昼休み終わるぜ」

「今、食うよ」

俺はそう言ひ、オムライスを食べ始める。

「しかしさ」

オムライスを急いで口に運んでいる俺を見て、円香が言った。  
「料理出来るなんて、すげえよな、お前」

感心したよう、うんうんと頷く円香。

「すげくなんかないよ」

下を向いたまま俺は言ひ。

「高2の時、親から家事教えられただけ。ほら、今俺さ、一人暮らししてるじゃん。そのために」

「それでもすごいよ。よく家事なんかやる気になつたよな」

「別にやりたかったわけじゃない」

「反抗すれば良かつたのに」

「反抗ね・・・」

「そういえば、何での時、俺は普通に受け入れたんだね?」

俺の親はそこまで厳格なわけじゃないし、反抗だって出来たはずだ。

「多分・・・」「ん？」

円香はキヨトンとした顔で俺を見る。

「反抗する気力がなかつたというか・・・。  
まあ、何とかなると思つてたんだよ」

俺はため息をついた。

円香はニヤニヤしながら、俺を見て言つ。

「自信家だなあ」

「・・・ウルサイ

「ただいま

いつも通りの日常を過ごし、俺は家に帰つて來た。

居間を覗いたが、ソファの上にアッシュがない。・・・何処行つた?

俺がソファに近付いた時、丁度トイレから水を流す音が聞こえた。  
何だ。トイレだったのか。

女がトイレから姿を現した。

「ただいま

もう一度、帰つて來た事を伝える。

女はソファに座り、俺の方を見る。  
「今、夕飯作るから。待つてて」

女は頷いた。

俺は冷蔵庫の中を覗き込む。

うーん。今夜は肉じゃがにしよう。  
あとは、適当な野菜。

俺は調理を始めた。

ちらっとの方を見てみる。・・・相変わらずソファでボーッとしている。

女を見てくるづけ、ふと思つた。

・・・そういえば俺、アイツの事「お前」とかしか呼んでないな。

名前なんか、多分ないだろうし・・・。

名前とかつけてやつた方が良いのかな?

その方が呼びやすそうだけど。

俺は玉ねぎを切りながら、女の名前を考えてみた。

・・・が。

全く思い付かない。

・・・正確には、失礼な呼び名しか思い浮かばない。

「口」とか「怪物」とか。

こんな名前、俺だって嫌だ。

。 。 。 。 。 。

・・・もうやめた!

名前なんかくたついていい。

特に困る事もないし、今まで通りで充分だ。

俺は玉ねぎのせいで痛くなつた手を押さえながら、女を見た。

そう、今まで通りで良いんだ・・・・・・！

「 出来たぞ」

俺は湯気の上がる肉じゃがを持って居間へと戻る。

女は勢い良くこちらを振り向き、急いでテーブルについた。

「・・・お腹空いたの？」

女は頷く。そして、箸に手を伸ばした。

「あつ、待て！まだ全部運んでないから！」

女は手を止め、そして大人しく引っ込めた。

・・・コイツが言う事聞いてくれる奴で良かった。

それにして、まあ、今更だけど

コイツ、箸とかスプーンとか使うんだな。

俺の予想では・・・もつと下品な食い方すると思つてたよ。  
例えば・・・皿のものを直接、口に放り込むとか。

俺はついでに作った野菜炒めとご飯と味噌汁を

2回に分けて持つて行つた。

女はその間も、両手を膝のあたりにくつづけて、待っていた。  
・・・何か、反省してる子供みたい。

俺も席に着いた。

「・・・」

女は両手を膝にやつたまま、俺の方に顔を向ける。

うーん…。

こうして見ると、大人の容姿でも、子供みたいなだ。

・・・そして、怪物みたいな容姿でも、人間なんだな。

俺は女を見続けていた。

女もこっちに顔を向けたまま、動かそうとしない。

・・・慣れというものは恐ろしい。

今、この俺のいるアパートの部屋に、誰かが入ってきたら。

警察に通報されるか・・・もしくは、恐怖と衝動に駆られて、この女に襲いかかってくる人間だっているかも知れない。

俺の部屋に勝手に入つてくる者はいない。

しかし、見つかる可能性はいくらもあるわけだ。

もし。

もしも、見つかった時。

俺は、どうすれば良いだろ。

俺は、素直にコイツを手渡すことが出来ないと思つ。

「同情」とかいう感情とは少し違う。

・・・でも、簡単に・・・。

簡単に、許してしまつた。

この異形な怪物が、この家で暮らす事を。

その時点では異常だ。

普通の人間は

こんな顔の輪郭全てが、口で成り立っている化け物なんて家に入れ  
えしない。

下手をすれば、殺されるかもしないのに。

なのに、俺はその化け物と一緒に暮らし、世話をまでしている。

恐れることもなく声をかける。

その化け物を家に1人きりにさせることもある。

自分の命が奪われる時が来るかもしれないといつも……。

俺は本当に異常だ。

その時。

服の肩の部分を引っ張られる感触に、我に返った。

肩の部分を摘む細くて長い指。

・・・それは、女の手だった。

目先をほんの少し上げると、真正面に女の顔があった。

・・・どうやら俺は、自分の顔を女に向かたまま  
考え込んでしまっていたようだ。

相変わらずの吸い込まれそうな程、テカい口。

俺ひとつで、もつもの存在は、『』へ普通のものだ。

女は俺の肩から手を離し、もうあまり湯気の出でいない肉じゃがを指さした。

マイツの言こたい事だつても、大分わかるよつになつてきた。

俺は深いため息を吐く。「……」めん。食べよつか

俺はだらんとした手つきで、自分の箸に手を伸ばす。女も箸に手を伸ばすが、さつきまでと違い、何だか気乗りしない手つきだった。

「・・・」

無言が続く。

とは言つても、女はいつも喋らない。・・・喋れないんだと思つけど。

俺、いつも、どんな事を話してたつけ。

「・・・」

しばらく無言が続いていると、女は箸を元の位置に戻した。

皿は空っぽ。食べ終わつたみたいだ。

「どうせまた、動き出して何かするんだろうと想つていた。

だが、女はいつもと違つた。

いつもなら動き出して、ソファに寝転がるか別の部屋に行くのに。

女は、俺の顔に自分の顔を向けたまま、動かない。

「……なんだよ」

俺が聞いても、無反応。

「コイツに皿はないが、顔を向けられるとこには、見られてるのと同じだ。

ジロジロ見られると、食いつらう。

「もう食つたんだろ?」

いつも通り自分の好きな事してろよ」

「コイツはマイペースだし、今日に限つて人を待つなんじよ」と、しないと思つけど……。

「俺が食い終わるの、待たなくて良こよ

それでも女は無反応。

・・・オイオイ。また最初の頃に戻ったんじゃないだらうな。

やがて俺は、ジロジロ見られている中、無事に食い終えた。  
「えりあひわせ

それでも女は顔を動かさうとしない。  
何なんだ、一体。

「・・・もしかして、まだお腹空いてるとか?」

「いいでよ」やく、女は首を横に振った。  
じゃあ何なんだよ。  
イライラしてきた。

「用がないなら、俺、皿洗つてくれるよ」

俺はそつまつして立ち上がった。

すると女も立ち上がり、俺について来た。  
本当に今日は様子がおかしい。

俺がスポンジを手に持つと、女もスポンジを手に持つた。  
・・・まさか。

「手伝ってくれるの？」

女は頷いた。

・・・え。 本当に？

今まで皿をさげる事すらしなかったコイツが?  
食つて寝る事だけが仕事だったコイツが?

・・・信じられない。

どうこつた風の吹き回し?

「ほ、本気？」

女はしつかりと頷く。

そして、スポンジに洗剤を染み込ませはじめた。あれ? いつそん  
なの覚えたの?

俺が驚いている間に、女は食器をスポンジで「ゴシゴシ」すり、そし  
て丁寧に水で洗い流していく。・・・いつの間に?

俺があれこれ考えを巡らせていくと、女は水を止めた。

さつきまで汚れていた食器が置かれていた流し台の中を見ると、そ

「」には何もなかつた。

次に女を見ると、まだ新しい黄色い布巾で、洗つたばかりの皿を拭いていた。

「・・・」

そして、全ての皿を拭き終わり、その皿を一つ一つ食器棚へと戻していく。

女は全ての皿を戻し終わり、さつきから動けないでいる俺の方を見る。

俺は、ようやく状況を理解した。

「・・・お前」

女はこちちらを見たまま動かない。

「いつの間にそんなの覚えたんだよ・・・」

女は無反応。

・・・何か反応してくれよ。

「コイツが元々、洗い方を知つてたつていう可能性もあるナビ・・・。  
・・・でも、一番考えられるのは。」

「もしかして、俺が洗つてるの見て、覚えた?  
食器を拭いて戻したりとかも」

女は頷いた。

・・・やっぱり。

それでも、何でいきなり手伝ってくれるよくなつたんだ?  
まあ、家に来て、1週間程が経つたわけだけど。・・・あれ? も  
う1週間も経つたんだ。早いな・・・。

女を見ると、もうソファに寝転がっていた。

親切心なのか、好奇心なのか・・・。  
といつあえず、礼を言ひべきかな。

「あのや」

女はソファに寝転んだまま、顔だけこりこり回せる。

「皿洗い、やってくれてありがとう」

女は何も反応しない。

・・・とこうよりは、黙つて聞いていた方が良さそうだ。

「おかげで、少し楽出来たよ。本当、感謝するよ」

ここで女は体を起こした。・・・びついたんだね。

「といひでさ。何で急に手伝ってくれる気になつたの?暇だつたか

「い・い・」女は首を横に振つた。

・・・え。じゃあどんな理由で?

まさか本当に親切心とか?

「じゃあ・・・何となくとか？」

親切心とはあまり思えなかつたので、女が頷きそつた質問にしてみた。

・・・見事に的中。

女は首を縦に振つた。

「・・・」何か・・・一番良くない理由な気がする。

複雑な気分だ。

・・・まあ、良いだらう。コイツのおかげで助かつたのは事実だ。

「そつか。・・・あとほ、好きな事でもしてろよ。  
俺も、部屋戻つて宿題やつてくれる」

女は頷き、そして再びソファに寝転がつた。

・・・ソファが気に入つたんだな。

そりやそうだ。

普段から、このソファで寝たり起きたりしてゐるもんな。  
いわゆるベッドの代わりだ。

俺は部屋に戻り宿題をやつたあと、外を眺めながら、不思議な気分  
に浸つっていた。

それはある意味、感動に近い感情だらう。

・・・ アイツって案外、記憶力が良いんだな。  
見ただけで、ああまでテキパキ動けるなんて、本当にすごいこと思ひ。  
大袈裟かもしれないが、不器用な俺にとっては  
羨ましいくらいだ。

本当に、アイツがあんな事出来たなんて。

色々な感情が混ざり合い、なんとも複雑な心境になる。  
・・・ 例えるなら、そうだな・・・。  
初めて自分の娘が家事の手伝いをしてくれて、  
感動し 泪を流す父親みたいだ。

窓から入ってくる、ふんわり暖かい風が、眠気を誘つ。  
・・・ 眠い。今日はもう寝よう。

俺は部屋の電気を消し、ベッドに潜り込んだ。

ウトウトしながら、俺は思っていた。

・・・何となくだけ。.

アーツでも、何かしらの変化が訪れたんじゃないかな。

完全とは言えないが、俺は女を信用しきっていた。

今まで俺が学校に行っている間は、トイレ以外はずつとソファに座つていろいろにしてもらっていた。

だが、いくら何でもそれは退屈だと思い、カーテンは閉め、玄関に出てたりしなければ、自由に家の中を動いても良いという事にした。もちろん、台所へ行つたり、危ない事をするのは、今まで通り禁止。女は素直に頷いてくれた。

あれから、何日か経つた。

俺が帰つてくると女は、テレビを観ていたり、本を読んでいたり・。  
・。色々だ。

コイツは田がないのに、どうやって見れているのか疑問だが、それは無視しよう。

・。そこまで疑問がいくと「普段どうやって食べたり歩いたりする事が出来るのか」  
という、単純な疑問にまで行き着いてしまつ。

コイツは人間じゃないし、何が出来て何が出来ないのか、分からない。

能力が知れてる、俺達人間とは違うんだ。

女は俺の言った事を忠実に守ってくれている。

俺が学校から帰ると、台所は朝と全く同じ状態。危ない事をした形跡もない。

とりあえずは安心出来る。

あの日以来、女は皿洗いを本格的にやつてくれるようになつた。  
おかげで俺の自由時間が増えて、助かる。

どうせ朝も昼も大して皿を使わないので、夜にまとめて洗つてもらいうことにした。

女は手早いし、皿も丁寧に洗ってくれていたので、支障なんか全くなかつた。

特に何かをやらかしたりもしなかつたし、俺が皿を離していくても大丈夫そうだ。

心なしか、皿洗いを楽しんでいるようにも見えた。

そして、今日。

学校帰り、俺はひとり、普段は全く寄らないファーストフード店にいた。

店の中は、客の煩い話し声で溢れていた。

接客をしている店員は、終始笑顔だ。

・・・俺は絶対、接客業なんて無理だな。

そんなに混んではいない。

俺はハンバーガーとポテトを持ち帰りで2人分頼んだ。

・・・何分か後に頼んだ物を持って来た時も、店員は笑顔。

・・・笑顔も仕事のうちなんだろうけど、無理しなくていいよ・・・

・・・こんな暑苦しい所で、ずっと客の相手しつぱなしなんだろうに・・・

俺は、「ありがとうございました」と言つてくれる店員に、哀れみの視線を向けながら、頭を下げて店を出た。

暗くなりつつある住宅街は、あまり人がいない。

・・・日が落ちるのも、早くなつたなあ。

俺は家に着き、急いで玄関の鍵を開け、中に入つていった。

既に電気は点いていた。「ただいま」

そのまま居間へ向かう。

すると女はソファに座り、何かの本を読んでいた。

「電気点けてくれて、ありがとな」

俺は自分の部屋に行き、鞄を置いて、また居間へと戻つて来た。

「何の本、読んでんの?」俺は、女の読んでいる本が気になり、表紙を覗き込んだ。

「料理の本。まさか、「洗いの次は、料理もやつてみたいとか、言い出さないよな・・・」  
の方をちらりと見た。

こくん。

俺の方をしつかり見て、頷いた。

「マジかよ・・・

そりゃあ、料理もやってくれればかなり助かる。買い物は俺が行けばいいし、料理のしかただって、教えられる。

コイツは器用だし、すぐ出来るようになるだろ。・・・でもなあ。

1回、俺の見てる時にやらせてみる必要があるな。  
明日で、やらせてみるか。

「じゃあさ、明日で俺の見てる時に何か作ってみろよ  
・・・何となく、出来る気がする。コイツなら、調味料とかなら、  
この間教えたし。

「料理の本を読んでたし、何か1つくらい作り方覚えてる?  
本見ながらでも良いんだけど」

女は頷いた。

・・・一体何を作る気だ?  
「何作る気?」

女は持っていた料理の本を開き、ページをめくった。

・・・待てよ。

そもそもコイツに、加減とか分かるのか?  
加減が分からないと、材料は同じでも、味がメチャクチャになるぞ。

色々と考えてみると、俺の皿の前に本が立ちふさがる。

「・・・」

オレンジ色の卵飯の上に、黄色い卵。

「・・・ オムライス」

俺はこいつかの事を思い出す。

ああ、コイツに食わせたこと、あつたな。

「作んの？」

女は頷く。

そして、再び本を自分の方へと引っ込めていった。

「・・・ 何でオムライス？」

俺は良いんだけど、だってコイツ、この前・・・。

俺が「美味しい?」って聞いたら、思いつ切り首を横に振ったじゃん。

不味いと認識したものを、普通、作りたがるもんかな。

普通、美味しいと思ったものを作ると思つけどな。・・・まあ、どうでもいいや。

「じゃあ明日、簡単にガスの使い方とか説明するよ。  
それから、作つてみて。オムライス」

女はしつかりと頷く。  
・・・自信あり気だな。

「さてと」

俺は軽く息を吐ぐ。  
「夕飯にするか」

女は勢い良くテーブルに着ぐ。  
・・・これももう、いつもの事だ。

「今日はいつもと違つよ  
俺はそう言いながら、女の分のハンバーガーと、自分の分のハンバーガーをテーブルに置いた。

「おっ」と、これも

俺は奥に入っていたポテトもテーブルに追加した。

女は無言でテーブルを見回している。

「・・・」

見たことないんだろうな。

「食つたこと、ないだろ」

女は興味深そうに頷いた。

俺は席に着き、適当に手を合わせる。

「いただきまーす」

俺がそう言うと同時に、女はハンバーガーに手を伸ばす。  
そして、物凄い早さで  
包んでいる紙をはがし始めた。  
・・・「ワイ。

「落ち着いて食えよ」

女はいつも以上にがつがつしている。

「ハンバーガーは逃げないよ」  
女は俺の言葉に耳を貸さない。  
・・・美味しいのかな。

「美味しい？」

女は首を大きく縦に  
2、3回振った。

「・・・へえ」

それは良かつた。

わざわざ買つてきた甲斐があつた。

何で俺が今日これを買つてきたかといつと、  
単純にコイツに食わせてみたかったからだ。  
・・・ある意味、味に煩いしな。

女はハンバーガーを食い終え、次はポテトに手を伸ばした。

・・・ポテトを食う迫力もすごい。

「それも美味しい？」

今度も女は首を縦に2、3回振る。  
・・・本当に美味そうだな。

俺もハンバーガーを食い終わった。

俺がポテトに手を伸ばすと、女はポテトを食い終わったよつで、じつと俺のポテトに顔を向けていた。

「・・・あげるよ

俺はそつぱつて、ポテトをぱぱりと女の手に乗せる。

女はその袋を受け取ると、自分の口まで持つて行く。  
・・・まさか。

「やせじぱせ」

女は袋を逆さにして、中に入っていたポテトを全部口に放り込んだ。

・・・今までで一番下品な食い方だ。

女は要らなくなつた袋を俺の方に投げた。

「そんなに美味かつたの？」

女は頷く。

そして、ソファに上つていった。

・・・クー。 クー・・・。

寝息が聞こえてくる。

「がつつくから疲れるんだよ・・・」

俺はため息を吐き、毛布を取りに押し入れに向かった。

俺は女に薄めの毛布をかけてやった。

「今日の朝の分と昼の分の皿洗いは、俺がやることになりそうだな・・・」

俺は寝ている女を少しだけ見た後、台所へ向かった。

明日はコイツと一緒に  
オムライス作りか。

トラブルが起きないと良いけどな・・・。

「準備は良いか？」

- ・ あつという間に今日になってしまった。
- ・ いや、あつという間って程でもなかつたな。

女は俺の方を見て頷いた。

実はさつきまで、ガスの使い方やら台所の使い方やら、色々教えていたのだ。

女は懸命に頷きながら話を聞いていた。

あとの細かい事は、調理中に教えよう。

「じゃあ、フライパン用意して」

女はさつき教えたばかりの場所から、素早くフライパンを取り出す。

・ 俺もいるし、一人でやらせてみるか。

「よし、ここからは1人でやってみる」  
女は頷いた。

料理の本は俺が持っている。

さつき、「本を見ながら作る?」と聞いたら、首をふんぶん横に振つていたからな。

「・・・

見てる限りは、順調、かな。

俺は、ちらつと窓の方を見る。

・・・夜だから、カーテン閉まつてるけど。

「今日は静かだなあ・・・

ダンダンダンダン!――!

「ん!?」

俺は思わず台所を見る。

「お、おいつ!」

女の方へと駆け寄る。

「そんなスピードで野菜切つたら、指まで切れやがつ」

女は手を止めた。

「そして、近所迷惑だから」

俺はため息を吐く。

・・・静かな夜が、一瞬にして打ち消された。

「指、見せてみ」

女はその細い指を広げる。

「裏も」

相変わらず手はキレイなままだ。

「大丈夫だな」

女は頷く。

そして、また野菜を切り始めた。

少しの間見ていたが、飽きて居間に戻つて來た。

ソファに座る。

「・・・何かテレビやってるかな」

俺はリモコンを探す。

・・・何処行つた?

普段はテーブルの上に置いてあるが、見当たらぬ。

俺はソファを下りて床を探す。

・・・やると、リモコンはソファの下に落ちていた。

「あつた。こんなところ・・・」

ダンダンダンダンダンーーー

再びあの煩い音が響く。

「おこつー。」

女はペタっと手を止める。

「俺が見てないからってやるなよー。」

・・・少しの沈黙の後、女は頷いた。

「・・・今度こそ、やるなよ」

女はしつかりと頷く。

そして俺はまた、居間に戻る。

・・・しかし、意外。

今まではずちゃんと並べることをいたのに・・・。  
コイツでも、自分の意志を通したいって気持ちはあったんだな。

ちりりと台所を見る。

もつときのきのうひも  
火の音は聞こえてこない。

多分、火の使い方も大丈夫だろ。  
さつき練習した時、出来てたし。  
うーん。でも・・・。

そんな事を考へて、俺はソファの上で寝てしまったようだつた。

肩を、搔すりれる。

「……………ん?」

俺は、薄く目を開ける。すると、目の前に女の顔がある。

「うわ！」

俺は慌てて飛び起きる。

やつぱ田の前にドヤカい口があつたらビーム。  
・・・一瞬、食われるのかと思った。

「な、何。出来たの？」

女は「くんと頷く。

テーブルを見ると、一人分のオムライスがきつちり置かれていた。

俺は時計を見た。

俺が寝る前、最後に見た時から、約20分が経っていた。

「初めて作るわりには、早かつたな」  
女は首を傾げる。

台所へと足を運ぶ。

台所は、キレイだった。ハゲな失敗をした跡もない。

「何か困ったこととか、なかつた？」

女は首を横に振る。

「そつか、それは良かつた」

俺はテーブルに着いた。

・・・見た目は美味そうだ。

しかも、『十一寧』にお茶まで置いてある。

「お茶、ありがとな」

女は何度も頷いた。

・・・早く食いたそうだな。

「じゃ、いただきます」

俺が両手を合わせると、何故か女はケチャップを持つ。

そして、俺のオムライスの前で逆さにする。

「かけてくれるの?」

女は頷く。

・・・何かく気だ?

前に女のかいたものが蘇る。

女は、思つままにケチャップを持った手を動かす。

「・・・」

6秒後くらいに、手を止めた。

「ありがと。長かつたな」  
俺はオムライスを見てみた。

「・・・。気に入ったの?」のマーク

女のかいてくれたマークは、予想通りハートマークだった。

女は無反応。

「・・・」

ハートマークはしっかりとキレイな形だ。  
丁寧だな。

女を見ると、自分のオムライスにもハートマークをかいていた。  
・・・気に入つたんだな。

女はオムライスと俺を交互に見る。

「……分かった。食べよう」

俺はスプーンを手に持った。

そして、女にじっと見られながら、オムライスの入ったスプーンを口に運ぶ。

「……美味しい」

俺の口から、ついそんな言葉が出た。

「これ、美味しいよ」

俺が女の方を見てそう言つと、女は何度もこくこくと頷いた。

そして女は、自分のオムライスをがつつき始める。  
ハンバーガーの時と同じだ。

「むせるべ」

女は俺の忠告も聞かずに、死にもの狂いでオムライスを口に運び続ける。

恐い。・・・けど慣れた。

それにしても。

「よくこんなに上手く作れたな」

女は自分の作ったオムライスに夢中で、じゅらを見ない。

「お前、すごいよ

俺は女を警めながら、自分の分のオムライスを味わって食べる。

・・・俺の作ったのより美味しいかも。

俺は女を見ながら思つ。・・・何でも出来る奴つて、本当にいるんだな。

女は食い終わったよつて、手を膝の上に置いてこる。  
俺も食い終わった。

すると女は、再びケチャップを手に取った。

そして、そのケチャップを自分の口の上で逆さにして、蓋を取る。

ボタボタボタボタ・・・・・

「お、おこ・・・」

少ししたらやめると思ったが、そりではなかつた。

それどころか、どんどん加速していく。

ケチャップが減つていぐ代わりに、女の口にケチャップが溜まつていぐ。

俺は悪寒を覚えた。

・・・何故だろ？

マイシのレジ係が異常な行動には、慣れているの。

もうケチャップの中は空になつた。さうして一歩うちに、たまひらひらしてゐる。だらりと、

俺は女の持っているケチャップを取り上げようと、ケチャップを掴む。

全力で引っ張るけれど、女の力も負けていない。

しかし俺が更に力を強めると、ケチャップは勢い余ってテーブルにとんでもいた。

そして同時に、テーブルの上に何滴かケチャップが落ちた。

すると女は我に返ったようにテーブルを見る。

しばらくの沈黙の後、テーブルに近付く。

「あ・・・

テーブルに落ちたケチャップを、舐めた。

尋常じやないスピード。

今までとは明らかに違つ。

異常だ。

空になつたケチャップを見る。

見事に一滴も残つていない。

震える手を何とか落ち着かせながら、の方を見る。

女は、何事もなかつたかのようにソファで寝ていた。

「・・・・・

何だつたんだ？

今までこんな事、なかつたのに。

頭が混乱している。

空になつたケチャップには、深く爪痕がついていた。

よつぽど強い力で押さえつけられたんだわ。

「・・・

俺はその日、全く眠ることが出来なかった。

赤いハサミ 赤い花

赤い本 赤い箸

赤い絨毯 赤いカーテン 赤いコップ

赤いゴミ箱 赤い食材 · ·

赤い皿

女は「赤」に執着するようになった。

あの日から、ずっと。

「・・・今日はロールキャベツ」

に、大量の潰されたトマトがかかっている。

俺が調理したんじゃない。

女が調理したのだ。

女はあるの日・・・ケチャップを異常な程飲み込み続けた日から、  
今日まで毎日料理をしてくれている。

朝も昼も。夜も。  
そして平日の俺の弁当も。

全て「赤」死へし。

「…………」

味は悪くない。

寧ろ良いんだけど……。

女はある時と同じように、落ち着いて食べていない。

最早、人間並みの早さではない。

食えた獣のようだ。

俺は女に

「料理はしなくて良い、今まで通り俺がやる」

と言つたのだけれど。

女は首を横に振り続けた。

・・・毎日食卓や自分の弁当が赤に囲まれている」ともだけれど。

それより俺は。

料理を作っている時、  
それを食べている時の、  
女を見るのが  
何よりも、不快だった。

女は食べ終わったようで、ソファに寝転がっていた。

・・・前まではあんなに積極的にやってくれていた皿洗いも、あれ以来

全くやらないなつた。

だからまた、俺が皿を洗っている。

俺は女を見ながら台所へと向かうが、女のじつじつとは変わっていない。

毎日、いつも通り。

料理を作る時や

食べる時以外は。

居間に新しく敷いた絨毯を見る。

・・・赤い。 真っ赤。

女が雑誌を見ていて、どうしても欲しそうだったから 買つてやつたのだ。

絨毯だけじゃない。

俺が今 洗っている  
コップや皿も。 赤。

それから、閉める時も赤。

赤いカーテン。

食材だけでなく、日常的なものも赤に染まつていった。

大人しかった彼女が、変わってしまった。

色々想いを巡らせてくると、俺はつい  
作業に集中出来なくなつた。

ガシャン！－

皿が床に落ち、割れた。  
手を滑らせてしまった。

「－」

俺は慌てて皿に手を伸ばす。

女もソファから起き上がり、俺の方へと駆け寄つて来る。

俺は気が動転していて、つい破片を触ってしまった。

「痛つ・・・！」

触れてしまつた人差し指に、ゆっくりと血が伝う。

女はそれを興味深そうに見たあと、俺の人差し指を掴む。

そしてそれを自分の方へ引き寄せた。

「な、何だよ。放せよ」

このところ、女に不信感を覚えていた俺は、女から勢い良く人差し指を放す。

人差し指を放しても、女は尚も 人差し指に顔を向けている。

「あつち行つてろ」

更に、冷たくあしらう。

それでも女は動かない。

そして、俺が割れた皿を片付けようと  
もう一度下を向いた瞬間。

再び、人差し指が持ち上げられた。

途端。

人差し指に

生温かい感触が伝わった。

女が人差し指を舐めたのだ。  
・・・血の付いた。

女は人差し指を放さない。

俺は小さく肩が震えるのが分かった。

「・・・ひつ」

相当強い力だつた。

それでも俺は、死ぬほど  
人差し指に力を入れて、何とか女から引き離した。

「何なんだよ・・・」

人差し指を見ると、さっきまで伝つていた血はなくなつていた。

代わりに、生温かい唾液が 人差し指を支配していた。

ぞくつ

女は何かに憑かれたように、俺の人差し指を凝視し続けた。

その日の夜中、俺は静かな物音で目が覚めた。

薄闇に、女がいた。

今まで夜中に起きることなんて、なかつたのに。

田を凝らすと、女は玄関へ向かっているようだった。

「・・・おこひー。」

俺は思わず起き上がる。

一応玄関の鍵は閉まつていいが、安心出来ない。

俺は走り出した。

・  
・  
・  
が。

何かに滑つて、転んでしまった。

「・・・」

鉄の鎧の一オイ。

これは・・・血だ。

居間だけは暗くぼんやりと電気を点けていたので、分かる。

女の方へ行くにつれ、赤い血がぽたぽたと  
床に落ちている。

でも・・・。

「何で？」

俺は急いで玄関へ向かう。

「向してんだよ。」

女は玄関の靴置き場に  
裸足で立っていた。

その手はドアノブを握んでいた。

そして顔を、こちらに向ける。

居間の影響か、玄関は真っ暗というわけではなかつた。

「……外に出たら……もひ、戻つて来れないよ？」

たとえ「異常」でも。

「異常」になつたとしても。

「俺はお前に会えなくなるのは・・・嫌だよ」

初めから感じていた。

この怪物は、人を魅了する。

「・・・・・」

女はドアノブから手を放し、じゅりりと向かってくる。

・・・俺は、少しだけホッとした。

俺は安心して、何気なく女の手に触れてみた。

ヌルツ　・　・　・　・

「・・・・・」

この感触。

それにこの生臭さ。

「・・・・血?」

俺が玄関に行き着くまでに落ちていた、何滴かの赤い液体。

よく見ると、女の腕から、びくびくと流れている。

「なんだ」と云ふ。

俺は女に詰め寄る。

次の瞬間。

女は今までにないくらい、顔を近付けて来る。

俺の目の前は、赤と白く尖ったものしか見えなくなる。

そして、今までにないくらい、強烈なニオイが自分から漂つてくれる。

痛いような、痛くないような。

不思議な感覺。

最初は、こうなることを予想して  
恐れていた。

でも、コマイシと日々を過ごすうちに、そんな不安は何処かへ行つてしまつた。

不安どころか、生きがいを感じていた。

・・・この生きがいだけは、絶対になくなつてほしくないと  
心から思った。

だけど、俺の考えは甘かった。

・・・結局、最初に予想していた通り、俺は喰われた。

張られた罠に嵌り

見事にこの女の餌食となってしまったのだ。

グチャグチャグチャ  
・  
・

勝ち誇つた音。

その煩い音を合図に。

俺の感覚はなくなり、  
意識は何処とも分からぬ  
・・。  
深くて暗い、闇の底へと落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9359m/>

---

口怪女

2010年10月9日13時06分発行